

いじろのとも

第一卷

二月号

信仰すると

わたしにとつて

信仰心とは

ヨーガをして

仏様のご加護を

信じること

仏様に身も心も

おまかせすること

すべてのことは

仏様のおはからいと

直観すること

すると

すべてにとらわれなくてもよい

自分が不幸と思わなくてもよい

あれこれと心配しなくてもよい

小さなことに腹をたてなくてもよい

人をうらまなくてもよい

そして

自分の身体が健康になる

心が安定する

いつもニコニコできる

強い意志をもつことができる

人にやさしくなれる

人に何かをしてあげたくなる

そして

幸せに

なれる

「幸せになりたい人は」

一、物おしみせず、骨おしみしない

「幸福になる生き方十ヶ条」 第一条 人にはできるだけ物おしみせず、骨おしみしないこと。

先月創刊号で、幸福な一生とはどんなものか、について書きました。また、そうした生活ができるようになるためには、何をしたら良いのかも、十ヶ条にまとめて書きました。今月号から当分の間、その一つ一つについて私が考えている事を述べていきたいと思えます。幸せになりたい人は、ぜひよく読んで実行して下さい。必ず世の中がちがつて見えて来ます。

二、布施の徳目

さて、上に述べた第一条ですが、仏教ではこの徳目のことを「布施（ふせ）」と呼んでいます。つまり、他人に対して自分の財産や労力などを与えることです。しかも、それを与える事によって、自分に何らの見返りも期待してはならないのです。人に対して与えることによって、自分が修行をさせて頂いているという感謝の気持ちをもつことが大事な訳です。そうした気持ちがあれば、人に与える事が

自分の喜びにさえなってくるものなのです。

三、禅僧、良寛さんのこと

今から百六十年ほど前の江戸末期に七十四歳で亡くなった良寛さんは、曹洞宗の禅僧で、人に頂くお布施だけを頼りに生活した人です。自らは働かないで、仏道の修行と芸術活動に専念しました。つまり、自分は清貧に徹することによって、人にはお布施の喜びを教えて下さった訳です。また、子どもと良く遊んだことで有名です。さらに、岡山には縁の深い人で、玉島の円通寺で二十二歳から三十四歳までの十二年間、国仙和尚について修行に励みました。円通寺には、良寛さんの像が立てられていますし、今も修行をしたお堂が残されています。一度お参りされてみてはいかがでしょう。

四、清貧に徹する

ところで、この良寛さんですが、前述のように托鉢だけで生活した訳ですから、とても貧乏で食器さえも有りません。お客が来ると、火葬場から死者の茶碗を拾って来て、それを使ったそうです。でも、それほど貧乏だったのに、

托鉢でその日に要るよりも多く貰うと、おしげもなく通りががりの乞食に与えたそうです。翌日は貰えないで、一日中空腹に耐えなければならぬことが、よくあったというのに。

五、和顔愛語というお布施

このように、良寛さんは自分に何か人あげる物があれば、おしまずあげた訳ですが、そういう物が無いときは、笑顔をもって優しい言葉かけをしたそうです。それは和顔愛語と呼ばれます。いつもそれを心掛けていましたので、多くの子ども達が良寛さんのまわりに集まって来ました。人は優しい心に出会う時、心が開いてきます。心が通じやすくなります。子ども達の純真な心が、良寛さんの優しい心を鋭く感じとったのだと思います。

六、真の教育は「響育」

こうした人間的触れ合いの基礎には、良寛さんの完成された人格とそれを感じとる子ども達のけがれの無い心とがあります。そこには真の心の通じ合いがあります。私はこうした心の触れ合いにこそ、真の教育的人間関係があると

思っています。それを私は「響育」という言葉で表しています。閑話休題。

七、慈悲と布施

このような良寛さんの生き方の根底には、仏の慈悲があります。それを布施を通じて具体化したのだと思います。他者からもお布施をもらいましたが、自らもそれをいつも心掛けていたのです。

こうしたお布施は簡単なようですが、自分に執着してはできません。自分を捨てないとできないものです。

八、商人、会社員にとってのお布施

商売をされている方には、お金が一番大切なものですが、自分にとらわれてお金を貯める事ばかり考えていては、商売は繁盛しませんし、お金も貯まりません。ひとさまにもうけさせてあげて、自分も少しはそのおかげを頂くといい気持ち、自分を捨てて相手の立場を先ず考える気持ちが大切です。人のお役にたつこと（布施）を考えていれば、商売は自然に繁盛してきて、結果としてお金も貯まります。でも、なかなかそうした気持ちになることは、難しいも

(挿絵・良寛さんのお姿〓省略)

のです。やはり毎日の修行がいります。ヨーガをするなり、念仏をあげるなり、座禅をするなりして修行していれば、自然にそうした気持ちになっていくものです。

会社員や勤め人の人でも、事情は同じです。会社や役所の組織の中で、人を生かそう、人の役に立とうとしていれば、自然に自分も生かされてくるものです。自分にとらわれて自分を生かそう、自分が偉く成ろうとばかり思っている、なかなかうまく生かせません。「捨ててこそ身の浮かぶ瀬もあり」です。お互いに毎日の修行に励みましょう。どうぞ毎日のヨーガを続けて下さい。

後記

一、創刊号を出して一ヶ月たちました。初めての試みなので、文章をべったり並べてしまい、読みにくいという感想を頂きました。今月号では、少しでも読みやすくと思い、縦書きに変えたり、スペースを取ったり、挿絵や詩を入れたりしてみました。どうぞどんなことでもけっこうです。少しでも良いものにしていききたいと思いますので、どしどしご意見をお寄せ下さい。

二、今年の初頭に、私が掲げた「星」のことを紹介します。その一つは、平均して毎日一つの詩を作っていくことです。これまで詩を作った経験はまったくなく、出来るかどうか不安でした。でもお蔭で、これまで四十数編ほど作れました。果たして詩と言えるものかどうか分かりませんが、出るだけ精進していききたいと思っています。

毎日の事ですので、日々の生活の中で感じたこと、考えたことを書いていくしか手はありません。どろどろしていたり、ばたくさかったり、理屈ばかり、お説教じみていたりするものが多くなり、詩とは呼べないかも知れませんが、出来る限り続けていききたいと思っています。

今月号の表紙の詩も、私がこれまでに作ったものの一つです。今後、スペースの許す限り掲載して行きたいと思えます。これもご感想を頂ければさいわいです。

三、四国八十八ヶ所の巡礼を、暇な時を見つけて半年ほど前から始めています。まだほんの少ししか巡っていませんが、先日二十一番札所、徳島県の太龍寺にお参りしました。行かれた方はお分かりでしょうが、狭く険しい山道を駐車場まで行き、そこからまた歩いて三十分ばかりであるとか、急な坂道を登りつめたところにその寺があります。そこは、西の高野山と呼ばれていると、行きがけの寺の看板に書いてありました。何故なのかと調べていたら、実はその昔弘法大師さまが、ここで「虚空蔵菩薩求聞持法」と言う修行（この仏の真言「ノウボウアキヤシャギャラバヤ・オンアリキヤマリポリソワカ」を百万遍唱えるもの）をされた所だと知って、納得出来ました。

以前読んだことのある、お大師さまの著書・三教指帰に阿波（今の徳島県）の大滝岳でこの修行をしたと書いてありました。徳島県に住みながらそれが何処か知りませんでした。この寺に参って初めてこの事を知り、感激しました。

お大師さまが修行された「南の舎心」に登り、そこに座ってしばらく目をつぶっていました。そのとき、わたしもぜひこの修行に挑戦してみたいという思いが、ふつふつと湧いてきました。

その後、父教章を得度させて下さった真言宗醍醐派宗会

議長の長尾光容師にこの話をしましたら、実はその方もそこで同じ修行をなさったとかで、大変な因縁を感じました。南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛。

合掌

月刊 こころのとも 第一卷 二月号	平成二年二月十五日 〒714 笠岡市走出一一三六の一 真言宗醍醐派 走出山 観音寺 中塚 善成 <small>ぜんじょう</small> （善次郎）
----------------------------	--